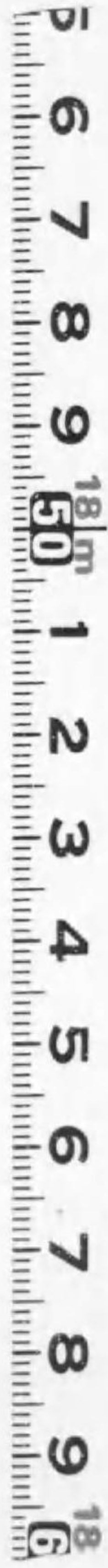


特116

348

神宮參拜の槩



始



持116
348



神宮禰宜正六位勳六等

松木時彦先生題詠

河原松聲校訂

清水藏造編纂

參拜の栞

神宮參拜栞刊行會發兌

大正
12.4.24
内交

おきき申すに

たのしみあり

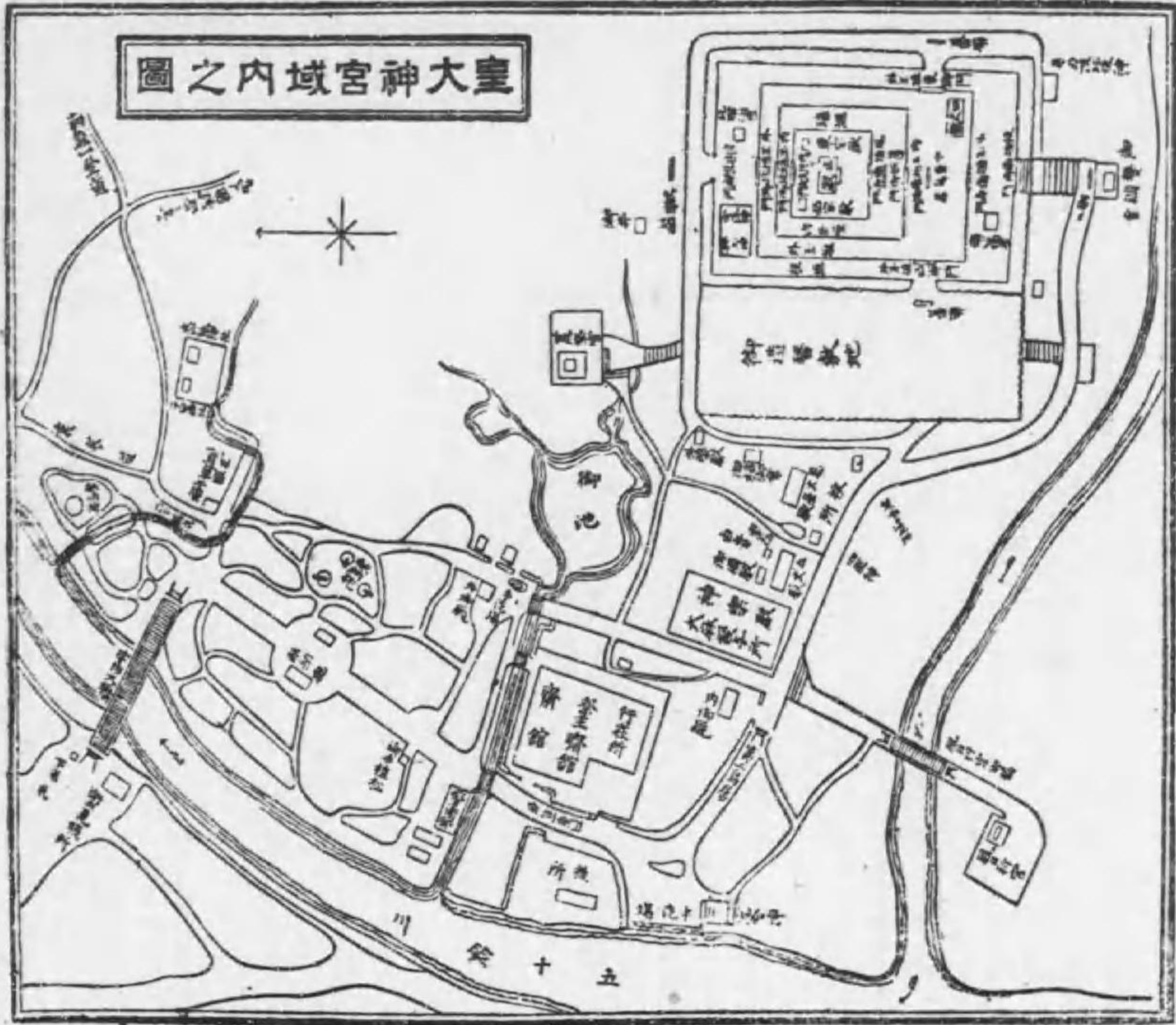
いふまじきこと

しるすに女

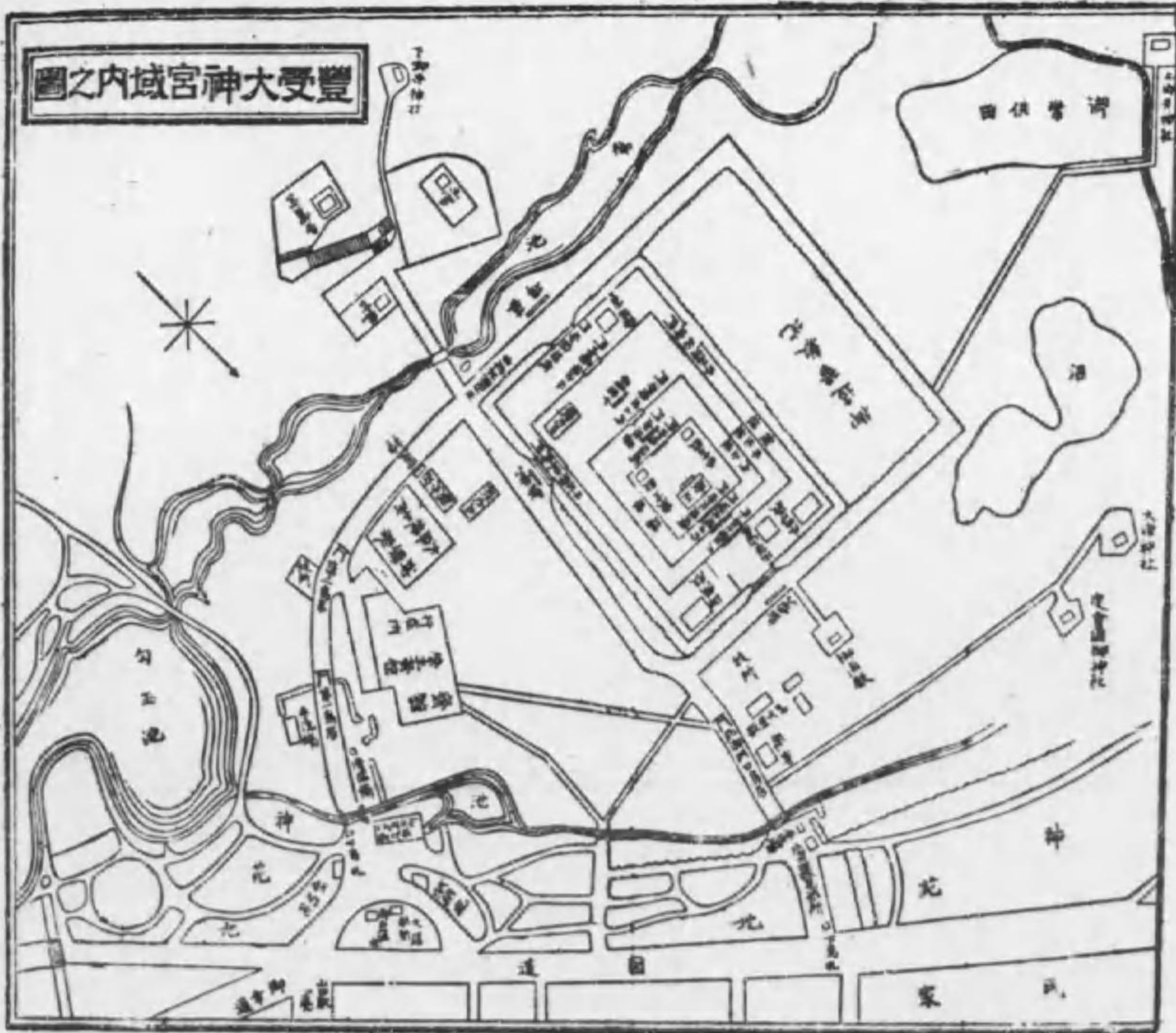
いふまじきこと

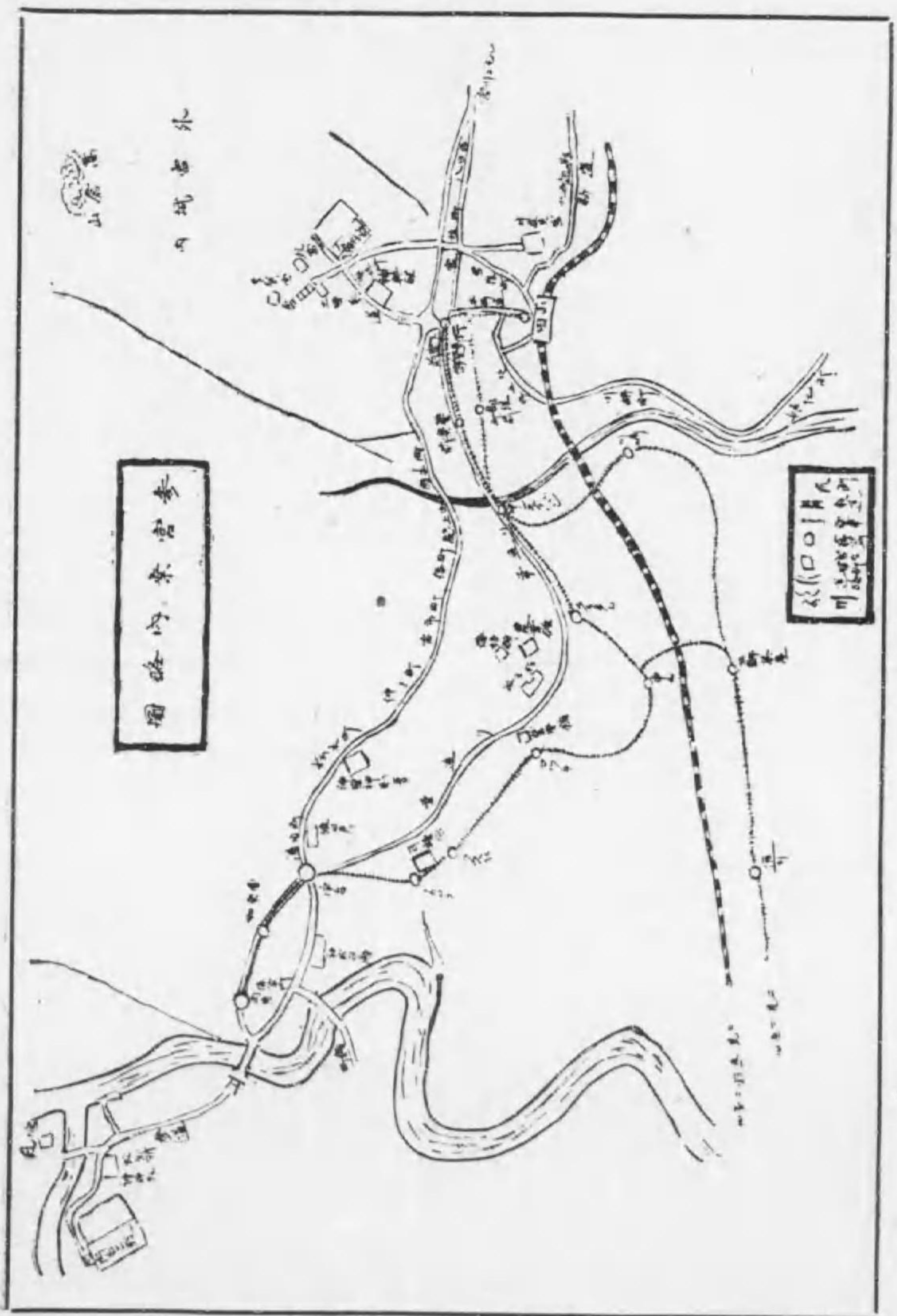


圖之內域宮神大皇



圖之內域宮神大受豐





神宮参拜のしをり自序

伊勢神宮には神宮司廳で編纂せられたる「神宮綜覽」神宮神部署發行の「神宮奉賽のしをり」などあるが是等は非賣品で弘く世の人々に知られてゐない其他には此方面の繪端書などを集め是に多少の説明を施したるものがあるばかりで参拜の順序参拜者の心得其他参宮に關する案内の簡明に出來たものゝないのは遺憾に思つて此書を刊行するに至つた

因に記す皇祖天照皇大神が皇孫瓊々杵尊を此國に降し給ふに當り豊葦原の千秋の長五百秋の瑞穂の國は汝子孫の治しめさん國である寶祚の隆へまさんことは天壤と共に窮りないと勅りし給ふた是は我が建國の骨髓で萬世動かぬ國體なることを示し給ふ所である即ち豊葦原の瑞穂の國は我が日本の美名であり千秋の長五百秋は千秋萬歳極りない意味である宜なる哉我國は大平洋上の一島國であるけれども往昔より蓬萊神仙の國として萬國より尊崇せられ皇孫御治世已來茲

に三千餘年間皇統は連綿として上には仁慈の君あり下には忠勇の臣民あつて上下和合し一國圓滿である斯の如き優美なる國は世界中唯一の我が日本國あるのみであつて此優美なる國體が無窮に傳はりつゝあるものは即ち皇祖大神の御威徳と御遺訓とが永久に傳はりつゝあるからである

已上述ぶるが如く此優美なる國土に住する我等七千萬同胞が皇祖大神の鎮まり坐す伊勢の神宮に參拜するは我が國の美俗であつて近世國運の發展するに連れ年一年參拜者の増加しつゝあるは實に欣喜の至りである仍てこゝに自序と併せて祝意を述べ置く所である。

大正十二年四月

編者誌

例言

- 一 本書は伊勢參宮をなし神都の名所を巡覽し神宮御鎮座の概況を知るに便したもので繁を省き簡明を採つたから普通世に行はれて居る案内記と聊か其趣を異にして居る。
- 一 本書は左の順序に排列して記事の連絡を執つた。
 - 伊勢神宮の御稱號—皇大神宮—内宮別宮—豐受大神宮—外宮別宮—遷宮祭—お木曳—行幸啓—神宮正式參拜資格者—神宮大祭日—御神樂祈禱と大麻曆—神宮廳署—伊勢參宮の順路—(山田 釋—外宮參拜—舊伊勢街道—御幸通—内宮參拜—名所巡遊—二見浦—鳥羽港)
- 一 本書には要所々々に寫眞版を挿入し兩宮域内圖を附して長文記載の煩を避けた。
- 一 本書記事の振假名は讀者の便をはかりすべて發音のままとし、又文體は冗長に亘らぬ様に約めなるべく敬語をも省くことにした。

大正十二年四月

編者識

神宮參拜のしをり

伊勢神宮の御稱號

伊勢神宮と稱し又單に伊勢とも稱し二所太神宮とも太神宮とも神宮とも稱し奉るのは、皇大神宮と豐受大神宮の兩宮を併せ稱するのである。又皇大神宮は天照皇太神宮とも天照太神宮とも伊須受能宮とも申し又内宮とも稱し奉り、豐受大神宮は豐受宮とも渡邊宮とも申し又外宮とも稱し奉る。

皇大神宮

皇大神宮は天照坐皇大神を奉齋せる大宮で垂仁天皇二十六年九月倭姫命が鎮祭し奉て以來今茲に一千九百二十七年を經六十二回の正遷宮七十餘回の臨時假殿遷宮を行はれた。謹みて按ずるに天照坐皇大神は伊弉諾尊伊弉冉尊の珍貴の御子神に坐して大日要貴と稱へ奉つた皇大神は生れました御時から奇しく靈しき大御徳を具へ坐したので御親神の大命を承けて高天原を治められ日大御神と仰がれさせ給ふた。神孫瓊々杵尊を斯の國土に天降りせさせ給ふて天下を統治せしめ給ふ御時、皇大神は御手づから寶鏡をお授けになつて

吾が兒よ此の寶鏡を視ますこと當に吾を視ますが如くし給へ、御殿を同くし御床を共にして齋鏡と

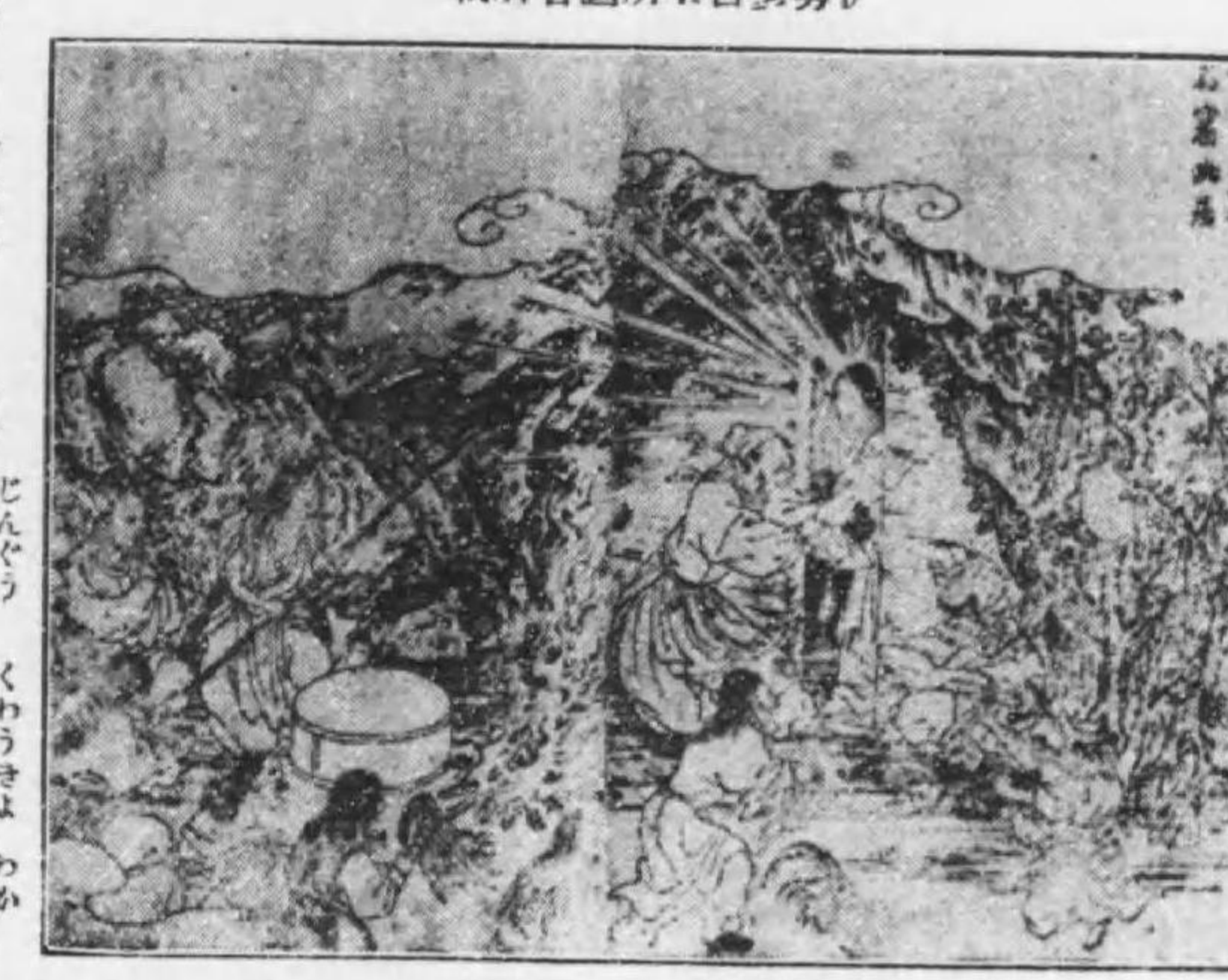
なし給ふがよろしい、又實祚の隆えまさむこと天地と共に窮り無からう。

と勅宣を賜つた。此の神勅は即ち我が國體の根元で立國の精神が確くここに定つたのである。爾來歴代

の天皇相承けて皇居に齋きに祭られ、

崇神天皇の御業神の原天高

業神の原天高
載所會圖所名宮參勢伊



幸巡御國諸命姫倭
載所會圖所名宮參勢伊



爾來歴代給ふて別殿に奉齋せらるゝ御事となり倭笠織邑に磯堅城の神籬を立て皇女豊鋤入姫命を御杖代と

して奉侍せしめられた。これが神宮と皇居と分れた始めて齋宮奉仕の濫觴である。其後神勅があつたので豊鋤入姫命は老年になつて居られたので、垂仁天皇の皇女倭姫命が代つて御杖代を奉仕された、これが第二代の齋宮である。

倭姫命が皇大神の神靈を奉戴して倭國宇多秋宮を始めに同國佐々波多宮、伊賀國隱市守宮、同國穴穗宮、同國敢津美惠宮、近江國甲可日雲宮、同國坂田宮、美濃國伊久良河宮、尾張國中島宮、三河國渥美宮、遠江國濱名宮、伊勢國桑名野代宮、同國河曲小山宮、同國鈴鹿奈具波志忍山宮、同國阿佐加藤方片樋宮、同國飯野高丘宮、同國佐々牟江宮、同國伊蘇宮、同國瀧原宮、志摩國多古志宮、同國宇久良宮伊勢國家田田上宮を経て遂に五十鈴川上の大宮地に御鎮座あらせられた次第で御鎮座地を定めらるるまで遷幸された宮所は十二ヶ國二十七所に亘り年歴實に八十九年の久しきに及んだのである。

抑皇大神の此の地に御鎮座あらせられた御事は高天原に坐し、御時猿田彦神と御幽契があつたからで宇治土公氏の遠祖猿田彦神は先づ五十鈴川上に天降つて大宮地を守護し奉り天狹田長田に準へてこゝに狹長田を開拓して皇大神の大御田を作り年久しくお待ち申し上げた。其後裔大田命相繼いで御鎮座の期を待ち奉つたのであつたから倭姫命が奉戴した神靈の遷幸を家田田上宮に奉迎するや、倭姫命に大宮地の有ることを奏し宮殿經營に力を捧げて遷御の大典を舉行するに盡し、大御田を作つて神供の御料を奉ることゝ致されたので、皇太神は大御心安く思召されて、倭姫命の御夢に、我が高天原に坐し

七

て見し眞伎志國の宮處であると御諭があつたから、倭姫命は大に悦ばせられて、直に送驛使を差立て、此の由を朝廷に奏上せられたので、天皇即ち祭官及神國造等を定め給ひ祭政の本を確立せられた。尙内宮正殿には天岩戸開きに大功のあつた天手力男神と皇大神の御子天忍穗耳尊の妃神である萬幡豊秋津姫命を相殿神として配祀してある。

内宮別宮

内宮別宮は内宮域内鎮座の荒祭宮(祭神天照皇大神荒御魂)を始の風日祈宮(祭神級長津彦命、級長戸邊命)度會郡四鄉村鎮座の月讀宮(祭神月讀尊)

内宮神寶



天照皇大神御魂、相殿玉柱屋姫命の九所にして、恒例臨時の祭祀總て本宮に准して行はれ、神殿の造替遷宮亦本宮と同じく二十一年目毎に行はれる。

豊受大神宮

天照皇大神五十鈴川上に御鎮座以來凡そ四百八十年を経た雄略天皇の御代二十一年の十月、皇大神は天皇の御夢に告げ給ふて御饌都神たる豊受大神を丹波國比治の眞名井原より奉遷して大宮近くに祭祀することを御諭示あらせられたので、天皇大に驚かせ給ひ度會神主の遠祖大佐々命をして豊受大神を丹波より奉迎せさせられ、翌二十二年九月伊勢度會の山田原に新宮殿を造營して遷御の隆儀を舉行せられ、相殿に御伴神三座を配祀されたが御鎮座以後、遷宮を行ふこと五十八回臨時假も深く之を御嘉賞になつて御饌都神と尊ばれ、天孫降臨の御時皇大神の神靈に副へて豊受大神の御靈をも御授けになり靈徳に頼つて朝廷及臣民の衣食を幸ひ給ふ御事とせられた。斯くて崇神天皇の御代皇大神を丹波國に奉遷すると同時に豊受大神の御靈をも同地に齋祀せられたのであつたが、皇大神の倭國に御還幸あらせられた時丹波に残されて居たのを雄略天皇の御代になつて神勅のまゝに山田の原に迎祭

外宮神寶



た靈徳があるので皇大神創生し衣食の道を開かれた靈徳があるので皇大神

し奉り、皇大神の御饌都神として日別朝夕の大御饌を供進する御事となつたのである。

外宮別宮

外宮別宮は宮城内鎮座の多賀宮(祭神豊受大神荒御魂)を始め土宮(祭神大土乃御祖神)、風宮(祭神級長津彦尊、級長戸邊命)、宇治山田市宮後町鎮座月夜見宮(祭神月夜見尊、同荒御魂)の四所あつて、恒例臨時の祭祀は本宮に准じて行はれ、神殿造替遷宮の儀亦本宮と同じく二十一年目毎に行はれる。

遷宮祭

太神宮正遷宮は天武天皇の白鳳十三年九月始めて内宮に行はれ、持統天皇の朱鳥二年九月始めて外宮に行はれた、これが式年遷宮の起原で、上古以來二十年目に改造し奉る制であつたを寛永度から二十一年目となつて今に至つた。正遷宮を行ふ期年前、山口祭、木本祭、御杣山木本祭を行つて山神を祝祭し秘木を伐採して御用材伐出し作業に着手し、次で御杣山で伐採した御榎代木と御用材とを山出しして兩宮に輸送する、之を御榎代木奉曳式、御木曳初式と稱し爾後多くの御用材を運輸するをお木曳と稱し神都人民が奉仕する一嘉例となつて居る。次で木造始祭、鎮地祭、假御榎代木伐採式、立柱祭、御形祭上棟祭、檐付祭、葦祭、御戸祭、御船代祭、洗清、心御柱奉建、杵築祭、後鎮祭等諸祭を行はれて宮殿の構造が完成すると愈々殿内の御飾を奉仕して正遷宮の大典を執り行はれる。

正遷宮には神宮祭主、大宮司、少宮司、禰宜十人、權禰宜二十人、宮掌四十人、宮掌補八十人、勅使、掌典、宮内屬、掌典補奉仕し、造神宮使、副使、主事、技師、屬、技手、囑託員、内務大臣、神社局長、内務大臣秘書官、三重縣知事等参列し、儀仗兵一箇大隊警護し奉るのである。正遷宮行はれた翌日奉幣式あり、其夕大御饌を奉奠して御神樂並に秘曲を奉納され、其後諸別宮以下にも奉幣御饌祭を行はれるのである。

大神官正遷宮の儀盛



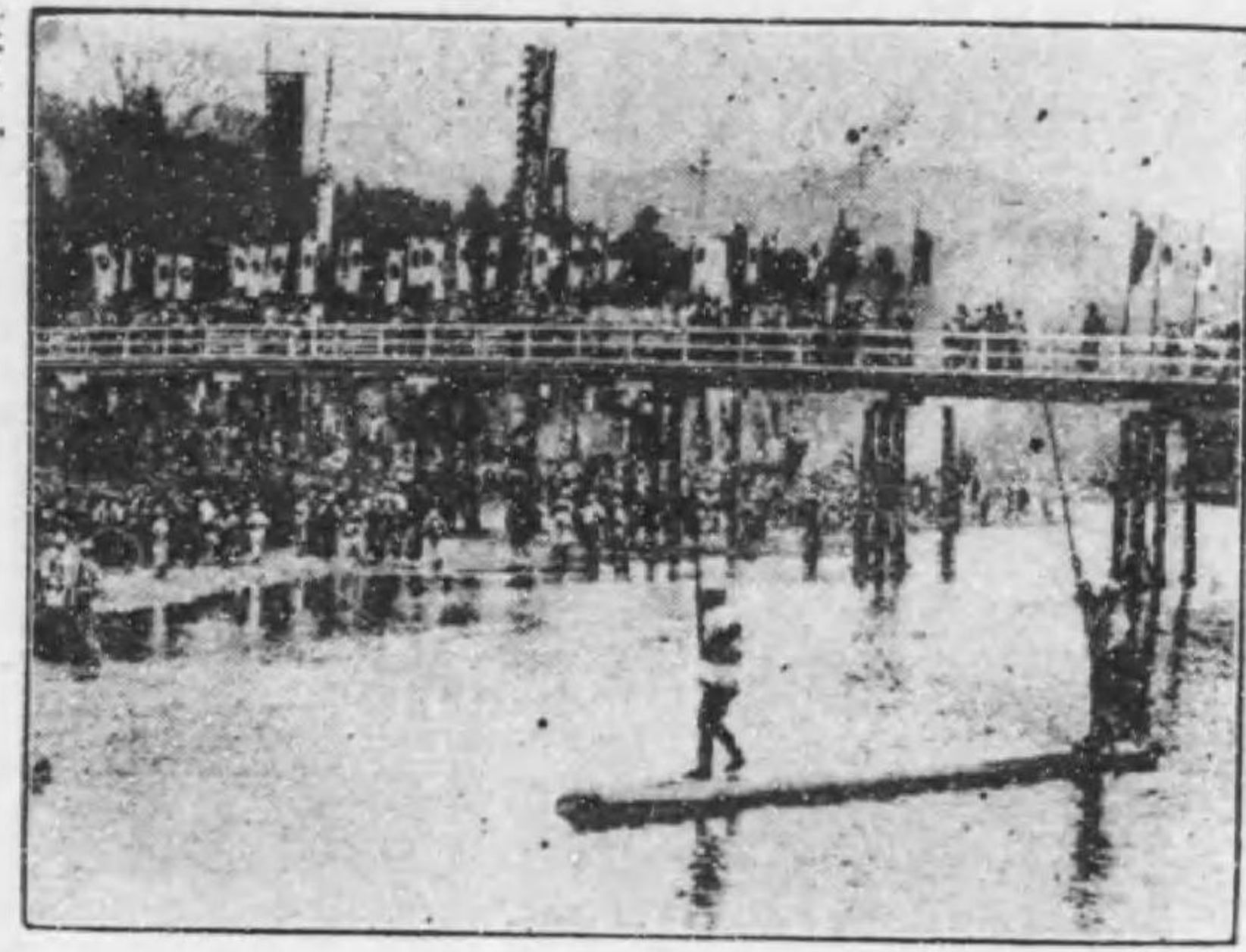
つて宮中に奉曳することゝなつたが、御木曳初式よりは舊神領たる宇治山田市及附近町村人民に奉曳を許され、古例に據つて盛観を極める。お木曳奉仕以前各町村思ひの揃衣を新調し旗幟吹貫など染め成して意匠を誇り莊大なる木曳車を特製し木遣子衣裳に綺麗を盡くし裝飾に艶美を加へて準備を整へ先づ二見浦に至りて候

お木曳

御榎代木奉曳式は神宮に於て行はれ造神宮使廳の役夫によ齋をなしたる上兩宮に参拜し奉曳日割によつて出動する。御用材は木曾山から搬出して伊勢海の大湊に廻送し置き。内宮領にあつては五十鈴川を曳き登つて宮城

内に納め外宮領にあつては宮川から車に積載して宮城内に曳き入れるを古例として居たが、當度から御
 用材輸送を汽車積となし名古屋から直ぐ山田に送致して總て車輛に積載搬入することに變更されたが、
 大正十一年には神都市民の請願によつて其一部を古

観壯の曳川木御宮内
 材用御の營造殿新爲の宮遷正年八十正大



景光曳車木御宮外



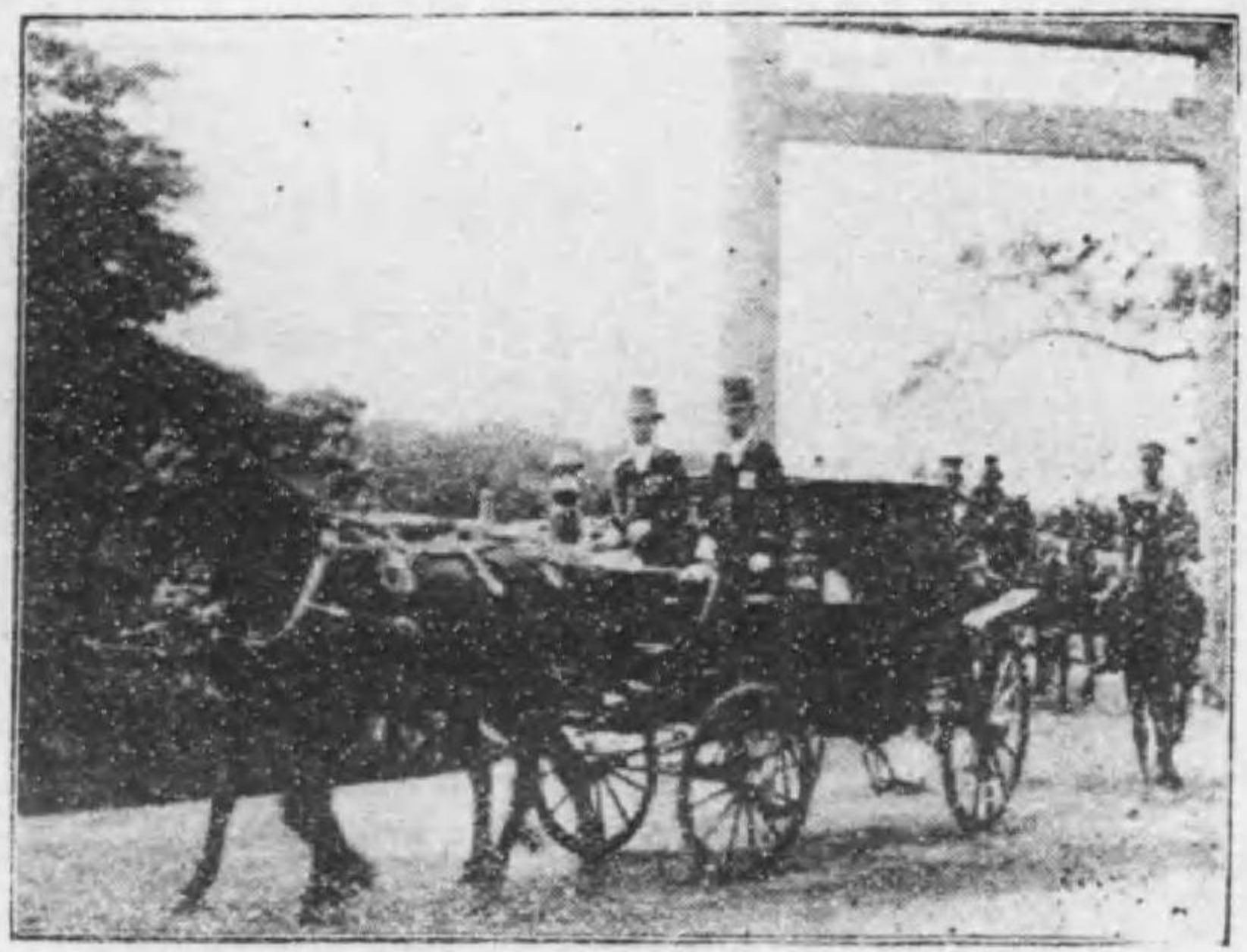
例によつて奉曳するを許されたので神恩報謝の一端と
 して勞力奉仕に感激して居るがこの醇俗は實に我が神

地の一特色と云つてよからう。
 左にお木曳の歌を二三摘録して歡樂の聲を傳へやう。

木 曳 唄

流れ盡きせぬ五十鈴の川を千代のためしに曳く宮木
 遠き昔の御代より今にた
 めしくちせぬ宮柱
 御木に注連繩鳥居に榊神
 代なからに曳く車
 御木は木曾山流れは伊勢
 路波にゆらく築屋敷
 清き流れの豊宮川に來る
 は神風御神木

拜參御宮神下陸皇天



たのは明治二年、明治天皇に始
 まり、次で五年、十三年、三十
 八年の四度天祖御親調の盛儀が
 あり。行啓は同二十年英照皇大
 后に始まつて、二十四年に東宮
 に坐した今上陛下、同三十三年
 に御成婚御奉告の爲め今上皇
 后兩陛下御同列で御參拜あそば
 され、同三十八年三度今上陛下
 の御參拜あり、同四十四年に昭
 憲皇太后御參拜、大正四年即位
 東宮殿下には御成年御奉告
 皇族諸殿下の御參拜

行 幸 啓

神宮御參拜の爲め行幸のあつ
 大禮御奉告の爲今上陛下御親拜の盛儀に次ぎ翌五年皇后陛下の御參拜あり
 歐洲御見學御奉告、御歸朝御奉告御就任御奉告等の爲數々御參拜の行啓あり、皇族諸殿下の御參拜

頻りに拜迎せられて神威皇徳の赫々たるを敬仰されるのは洵に神都の光榮である。

以上、勳三等以上。

神宮正式参拜

資格者

神宮に於て取扱はるゝ正式参拜資格者と拜所の位置は左の如くである。

拜参御宮外下陸后皇



○中重鳥居下

奏任官、同待遇、貴衆兩院議員、有爵者の家族にして華族の禮遇を享くる者、從八位以上、勳八等以上、勅裁又は官制に依り補命せられたる者、道府縣會正副議長。

○外玉垣御門内擔下

親任官、勅任官、同待遇官、貴衆兩院正副議長、有爵者、從四位長、郡市會正副議長、市制第六條の市の所屬區長及び區會正副議長、紅綬褒章、綠綬褒章、藍綬褒章、黃綬褒章、佩用の者。

□前各項の配偶者は其の夫の資格に準じて取扱はる。

□外國の貴賓及び在官者は本邦の之に相當する資格に準じて取扱はれる。

神宮大祭日

| | |
|------------------------|-----------------|
| 皇大神宮 | 豊受大神宮 |
| 祈年祭 二月四日 御饌奉幣 | 同上 |
| 神御衣祭 五月十四日 御饌奉幣 | 同上 |
| 月次祭 六月十六日夜 御饌奉幣 | 六月十五日夜 御饌奉幣 |
| 神嘗祭 六月十七日 御饌奉幣 | 六月十六日 御饌奉幣 |
| 新嘗祭 十月十六日夜 御饌奉幣 | 十月十五日夜 御饌奉幣 |
| 月次祭 十月十七日 御饌奉幣 | 十月十六日 御饌奉幣 |
| 新嘗祭 十一月二十三日 御饌奉幣 | 同上 |
| 月次祭 十二月十六日夜 御饌奉幣 | 十二月十五日夜 御饌奉幣 |
| 新嘗祭 十二月十七日 御饌奉幣 | 十二月十六日 御饌奉幣 |

御神樂祈禱と大麻曆

兩宮に参拜して神意奉安、寶祚無窮、國家泰平、家内安全、子孫長久、諸願満足を祈る爲御神樂を奏行し、御饌を奉奠せらるゝなれば相當御初穂料を添へて受附係に願ひ出ることになつて居る。又御神樂を奏行した祈禱大麻を別に拜受したい方は所定の御初穂料を納めて授與を請ふがよろしい。御神樂祈禱は

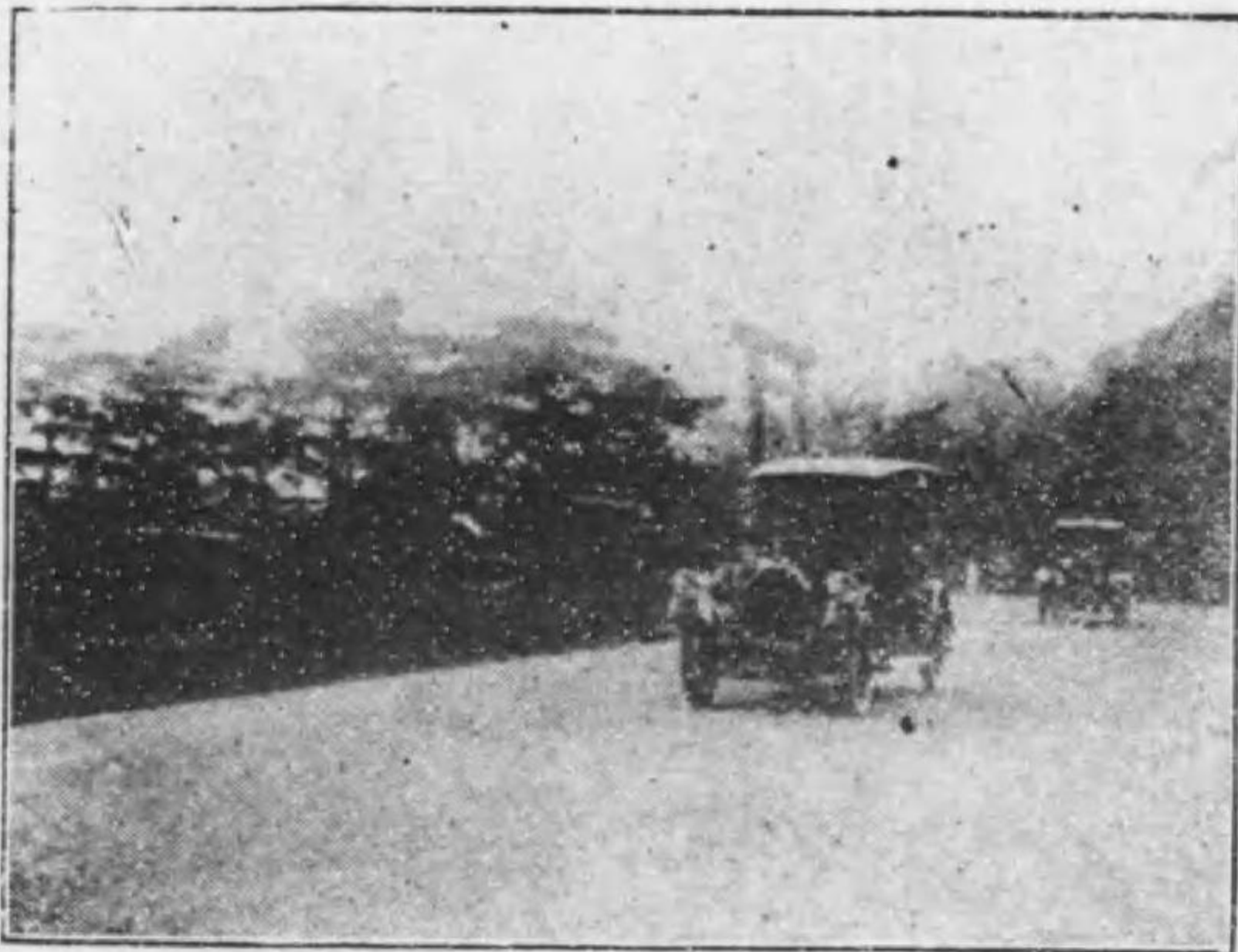
参拜した時に限らず自宅に在つても願ひ出ることが出来る。其場合は願意を詳しく認め御初穂料を郵便爲替にして神宮神部署第二課宛送附すれば直に御神樂祈禱を取計らひ大麻等を送達される。

して神徳を感謝し寶祚の無窮を拜祈しなければならぬ。

神宮廳署

大麻は其宮域内の大麻授與所に於て授與せられ、神宮神部署の各支署に於ては特に頒布大麻を奉製し祈禱を修して年々十月十五日から十二月末日迄の間に、全國各戸に頒布する事になつて居り、同本署で製造した曆をも添へる事になつて居るから伊勢神宮を尊崇敬拜する方は大麻を拜受奉祭任)、權禰宜二十員(判任)、宮掌四十員(判任)、伶人十四人(判任待遇)、技師二員(奏任)、技手十員(判任)以下諸務囑託及雇員六十餘人あり。司廳所管の神宮警衛部には衛士長一人(奉任)、副長二人(判任)

東宮殿下内宮御參拜



神宮の一切事務を管理する神宮司廳は舊政廳に次いで明治四年に改置された處で宇治山田市中之切浦田の入會地たる五十鈴川西岸に在る。神宮には祭主一員(親任)、大宮司一員(勅任)、少宮司一員(奉任)、禰宜十員(奏任)、技師二員(奏任)、技手十員(判任)

衛士九十八人(判人待遇)あり。神宮皇學館には館長一人(勅任)教授十人(奏任)助教十人(判任)學生監三人(同上)、書記三人(同上)囑託講師二十餘人あり。神宮文庫には主幹一人、書記二人、雇一人あり。徴古館農業館には館長一人(少宮司、兼務)、書記三人、監守長一人、監守九人、園藝手一人、雇二人、評議員五人あり。

山田驛前



又、神宮神部署は明治三十三年設置した處で、署長一人(奏任待遇)、神部二人(同上)神部補十八人(判任待遇)伶人十四人、樂員三人、雇員二十五人、事務囑託七人あり。之に宮後神都の名所古蹟を巡覽せらるゝ道筋を案内しませう。

伊勢參宮の順路

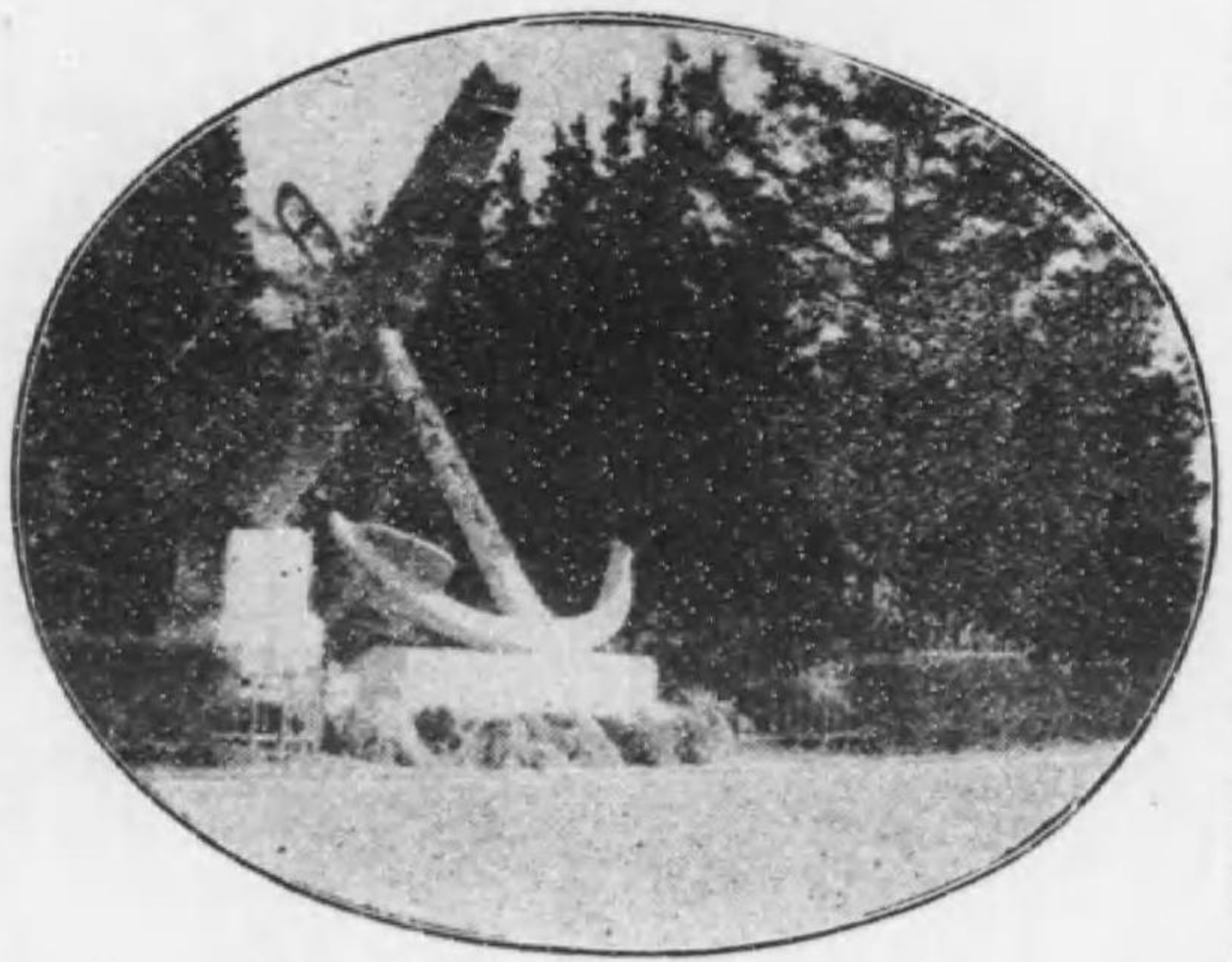
伊勢神宮參拜の爲め遠近各地方から宇治山田市に來られ

山田驛

山田停車場に下車して真直に三町程行けば外宮神苑に入るのであるが其間を本町通と云つて大旅館と土産物店が軒を並べて盛に營業を競ふて居る、真向に古い翠の色を重ねて半空を彩つて居るのが高倉山の即ち外宮の神山に屬し山上に大石窟を存して居る。土俗之を天の岩戸と呼んで居るがこれは春日戸高座神が住んでゐた處だとも云ひ又伊勢津彦神の穴居の跡だらうとも云ひ又天日別命が火氣を避けた處だらうとも云ひ傳へて居る。豊受大神宮御鎮座以來曾て斧鉞を入れない靈域であるから森嚴の氣が籠つて仰ぐも畏い者は衣服を正し心身を清くし大神に對して毫も不敬の事なきやう注意すべきは勿論、神地に參入する敬度の心得を最も緊張すべきである。

日海戰捷記念大錨

ニコラス一世世艦備附園明治十四年海軍省納



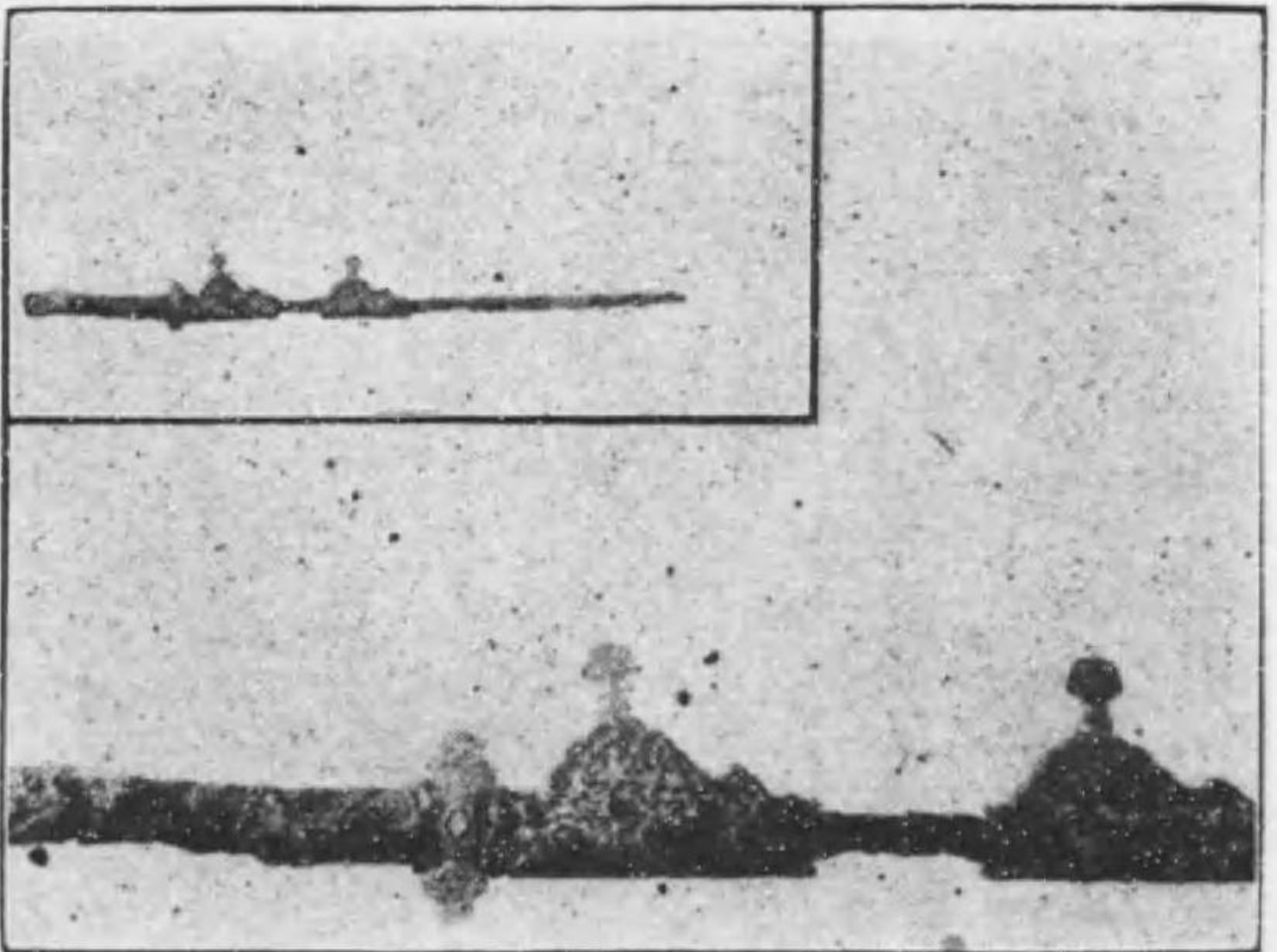
一八
雄姿である。

●外宮參拜

神苑に入ると直ぐ右方に今上天皇陛下の御手植松、日露戰役記念の大錨がある。又左方には日清戰役記念の大砲がある。一鳥居口御橋前は即ち下馬下乗所で右側に神宮衛士の詰めて居る警衛所があつて神宮域内を警護して居る。一般參宮

一鳥居口御橋を渡つて參道を進むと左側に手洗場がある。其右方に名高い清盛桶があり、宏壯な行在所と齋館がある。行在所は兩陛下を始め皇族方の神宮御參拜の御時御立寄りになる處、又勅使の入らるゝ處で、齋館は諸祭典の節の祭主大宮司少宮司禰宜權禰宜宮掌以下諸員の參籠齋戒する處で、内宮域内にあるのも亦同様である。一鳥居を參入して程なく二鳥居を潜ると右側に御神樂殿并に大麻授與所があり、其接續地に九丈殿と五丈殿とがあるこの九丈殿は外宮の攝社末社を遙祀する祭場に充てられ、天照皇大神、豊受大神を始め兩大神宮の相殿神及び十三所の別宮に奉るのである。又御廬は宮内省から獻身された神馬を飼養してある處で、今二頭飼養されてある。十字路の左は別宮多賀宮、土宮、風宮の

神宮寶物



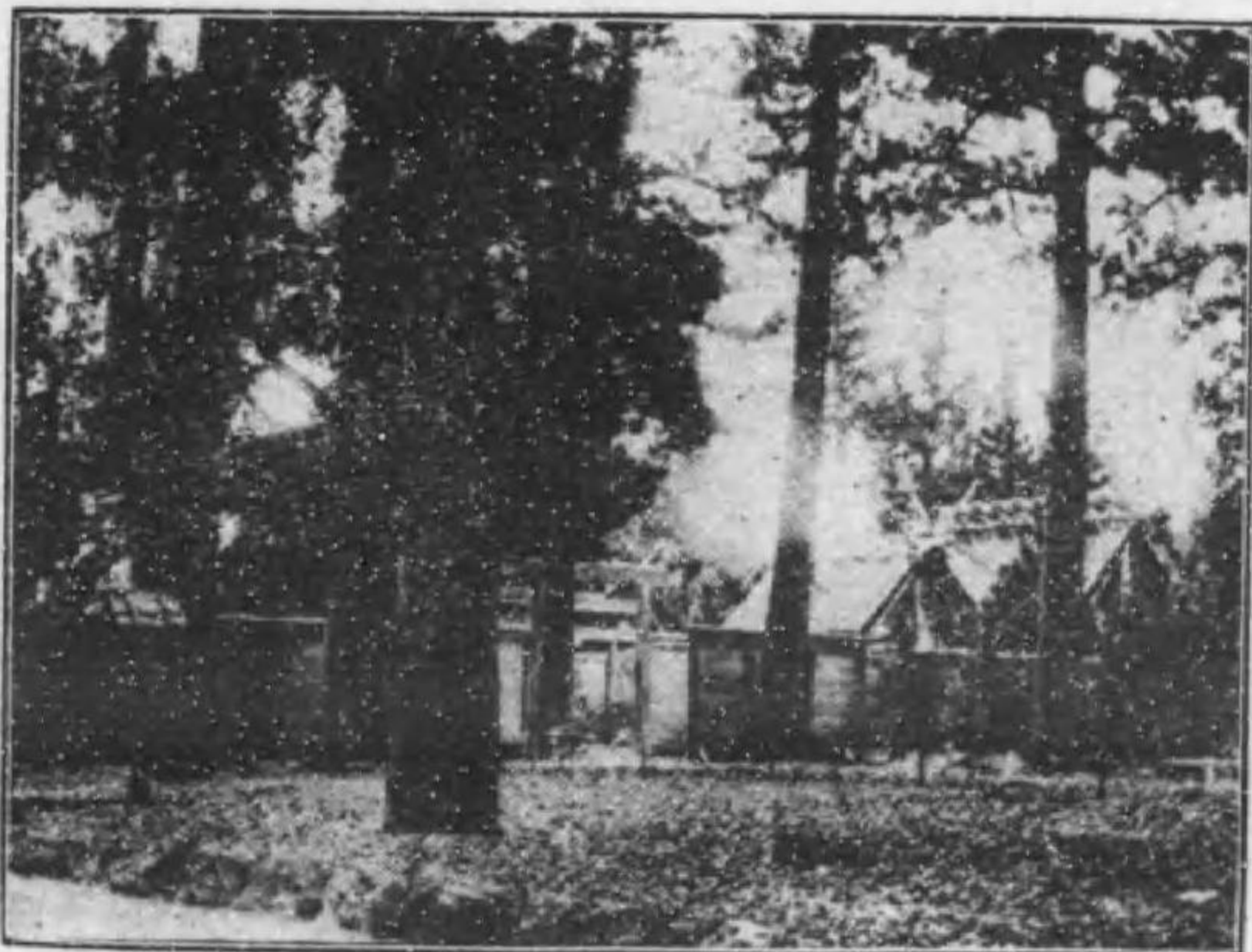
五丈殿は遷宮祭中饗膳の儀を行はれ、又、雨天の節、官弊及神饌等の修祓を行ふ處に充て用ゐらるゝ式場である。神樂殿前を少し進むと十字路がある。右は裏參道で之を北御門口と云ひ、街道に出る間に忌火屋殿、北御門口鳥居、御廬、御橋、衛士見張所がある。忌火屋殿は日々朝夕大御饌を調理して御饌殿に供進し

参詣道で其入口の御池には緋鯉真鯉や鴛鴦が澤山居て人馴れた様子の如何にも應揚に見えて宮城の尊さが直覺される。

十字路を直ぐに進めば即ち外宮御正殿で御垣内に南宿衛屋、北宿衛屋を建て晝夜神官奉仕して御警衛に務め、正式参拜を取扱つて居り、東西南北の四門には衛士が嚴重に立番して居る。

殿正宮外

長宣 人の世へ思をみ恵の神の受豊に毎ふく物に皆潤



神殿の御構造は神明造葺いで九本の鯉木を置き外切の千木を組立て金色眩ゆい金物を以て飾られてある。中央正殿の位置に於て参拜することが出来る、之を正式参拜と云つて親任官勅任官同待遇及従四位勳三等功三級以上は内玉垣御門檐下、奏任官同待遇及従八位勳八等功七級以上

は中重鳥居下、判任官同待遇は外玉垣御門内で拜禮し其夫人も夫同様に取扱はれるが、禮装に注意して男子は大禮服、燕尾服、フロックコート、制服を着け、又、無地の紋服に羽織袴を着けて草履を穿くこと、女子は袴袴、尋問服、又は白襟無地の紋服を着けて草履を穿くことを忘れてはならない。

庫文崎宮

慶安年中其子職 延口問學 佳講堂 弘村文庫 正立の花名 等正立の花名 所しに神宮 師に神宮



外宮の参拜畢れば別宮多賀宮土宮、風宮に参拜して宮域を辭し、神苑の風致を巡覽して後内宮に向ふのであるが、外宮前に於て御幸通を行くと舊伊勢街道を行くとの分岐點に立つ。

●舊伊勢街道

外宮前で内宮行の電車に乗らず、神苑に沿ふて右の大道を進めば岡本町尾上町倭町古市町中之町櫻木町を経て浦田町に至り十字路を直進して中之切町今在家町を過ぎ宇治橋前に達して御幸通に合する。この舊街道中岡本町には御屋根櫻に名高い宮崎文庫、尾上町には、勅使齋館、間の山お杉お玉、倭町には倭姫命御陵傳説地、古市町には伊勢音頭で世に開きた、妓樓油屋騒動で名の賣れた旅館 劇場 長盛座、中之町には畫僧月儼の居た寂照寺、葛籠石、聚樓遠、櫻木町には太鼓餅、

神宮神部署があり。浦田町にはお杉お玉の間の山、内宮長官藤波氏富卿の改修された浦田坂、猿田彦神社がある。浦田町の十字路を右に御幸通に向はす、直ぐ舊伊勢街道を右に折れて二町程行けば右に祭主官舎左に神宮司廳があり尙一町程行けば中之切町なる五十鈴川新橋の袂に名物赤福餅がある。新橋を渡る右側に神宮文庫がある。此の文庫は元、林崎文庫と云つて

徴古館
元宮大
神宮博
物館
の會
社
の
管
理
に
係
り
明
治
二
十
四
年
茲
に
新
築
移
轉
し
今
一
示
を
遵
ふ



如雪園
大正十一年七月父宮殿下臨幸を賜ふ



宮崎文庫と共に神宮に深い由緒のある處で、今林崎文庫宮崎文庫及び神宮の圖書を併せて九萬七千五百冊を有し、公衆の閱覽に供してある。中之切町の次は今在家町で山田驛前本町通と同じく旅館もあり多

くの土産物店が軒々櫛比して隆昌して居る。

御幸通

外宮前から左に御幸通を徒歩すると、岡本町、岩淵町、倉田山を経て度會郡四郷村大字楠部、北中村を過ぎて浦田町に出で、舊伊勢街道を横断して十字路を成し、直通して中之切町、今在家町の山下を経て宇治橋前に達し舊伊勢街道に會する。此の間には岩淵町に宇治山田市役所、山田税務署、三重合同電氣會社山田支社、安濃津刑務所山田支所、度會郡役所、縣社箕曲中松原神社、岡本町に山田區裁判所、宇治山田警察署があり、倉田山に徴古館、農業館、皇大神宮別宮倭姫宮、神宮皇學館あり、北中村に皇太神宮別宮月讀宮同荒御魂宮伊奈岐宮伊奈彌宮あり、中之切野に大阪市帶谷傳三郎經營の如雪園がある。如雪園は内宮長官中川經高卿の開いた遺蹟で、

經高

西山の幽栖を如雪園となづけて
おもかげの雪こそ花の曙も月の夕べも名はよこにふれ
ご鑄つた銘石を存じて居る。大正九年帶谷氏之の地を開拓修營して舊園號を其儘神境の一名所となした處で、位置は内宮神苑を距る一丁の西北方行幸通に面した道高丘に在つて全面積一萬三千餘坪を有し、其上層には廣大なる休憩所接待所を建て學生軍人青年團員及各種團體を接遇し講演會を開き夏期には林間學舎を開設し、中層には貴賓休憩所を設けて貴賓を奉迎し朝野の名士を歡待し社會奉仕に最

善の力を捧げて居る。此園地經營者たる大阪市帶谷傳三郎氏は敬神崇祖忠君愛國の精神涵養に盡くすべく常に巨資を提供し其一生を意義あり異彩ある事業に修飾して居るが、大正十年十月東伏見宮同妃兩殿下神宮御參拜の御時特に本園に御立寄あらせられて松樹の御手植を賜はり、十一年七月には秩父宮殿下神宮御參拜の御時特に本園に御立寄あらせられ、次に十一月五日皇后陛下神宮御親拜當日大森皇后太夫を御使として本園に御差遣あらせられ實地視察の上種々御下問あり特に園主帶谷氏を召されは恩賜品を下し給ひて出格の光榮を拜受せしめられた。此年徳川家達公及加藤首相水野内相高橋前首相床次前内相其他現内閣各大臣及陸海軍大官貴紳名士等の登園したること及び、本年一月三十一日御成年御奉告の多神宮に御參拜遊ばされた久邇宮邦久王殿下の御登遊を奉迎して榮譽を重ねたのは、常に賜望の絶勝地たるの故のみでなく園主の美德を嘉稱せらるゝ爲である。

御幸道の極端は縣管公園で左折すれば宇治橋前となり直に舊伊勢街道に會する。

宇治橋前は即ち下馬下乗所で右側に衛士見張所があつて非違を警戒して居る。

●内宮參拜

宇治橋の架つて居る清流は五十鈴川で右方にあるが神路山、左方にあるが朝熊山脈である。

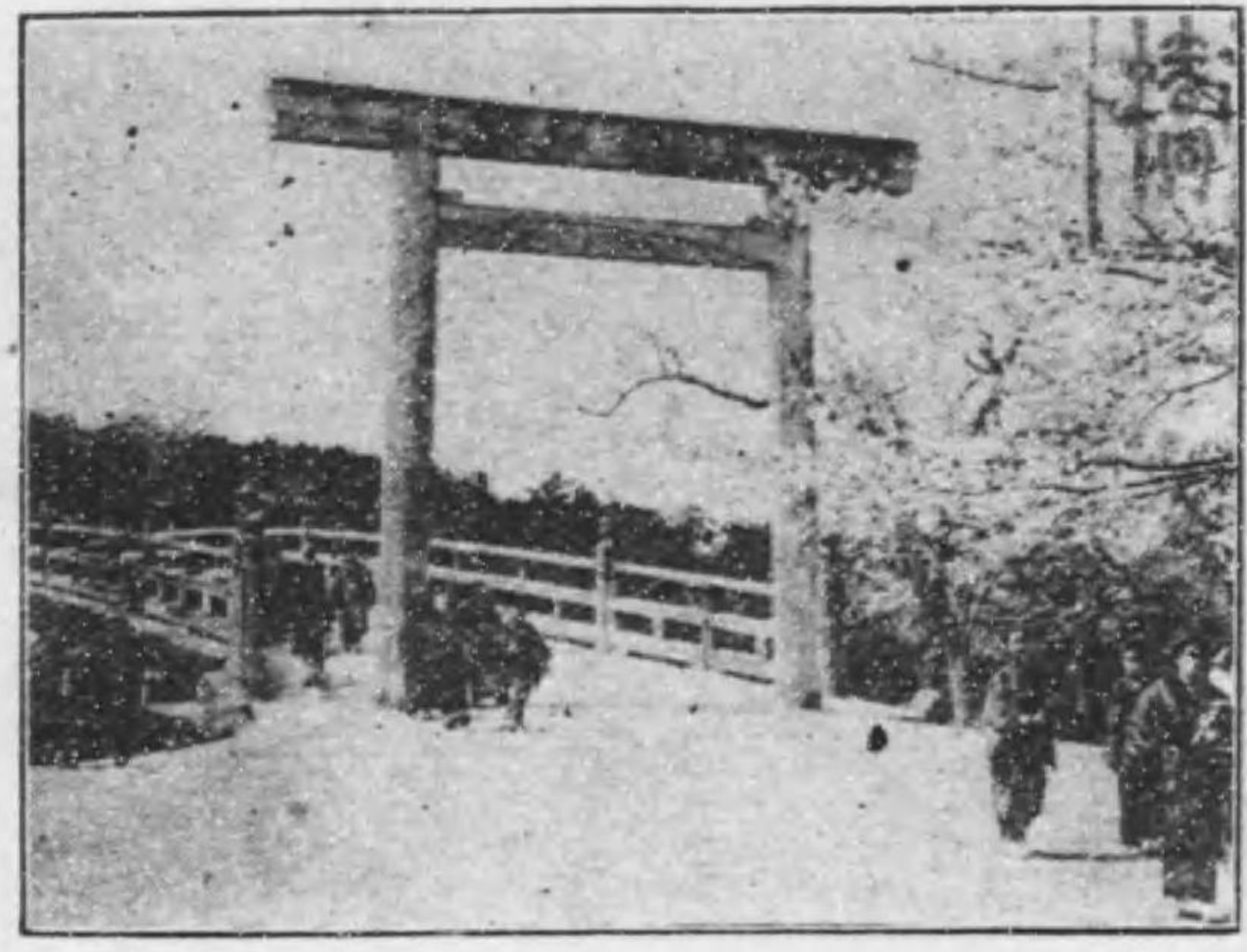
宇治橋を渡れば内宮神苑となり、左方の山際に日露戦役の大砲が直立し、一町程右に進めば日清、日露兩戦役の記念砲が三ヶ所に据附てある、これ皆神護天祐に奉養したもので國威發揚の實現を敬仰せしむる活教材である。

今上天皇陛下御手植の松を右方に敬拜して一鳥居口御橋に差しかゝると衛士の詰所たる警衛部がある。

一鳥居
口御橋
を渡る
と左側
に齋館
あり、
一鳥居
の内の
左側に
行在所
と祭主
て居る。

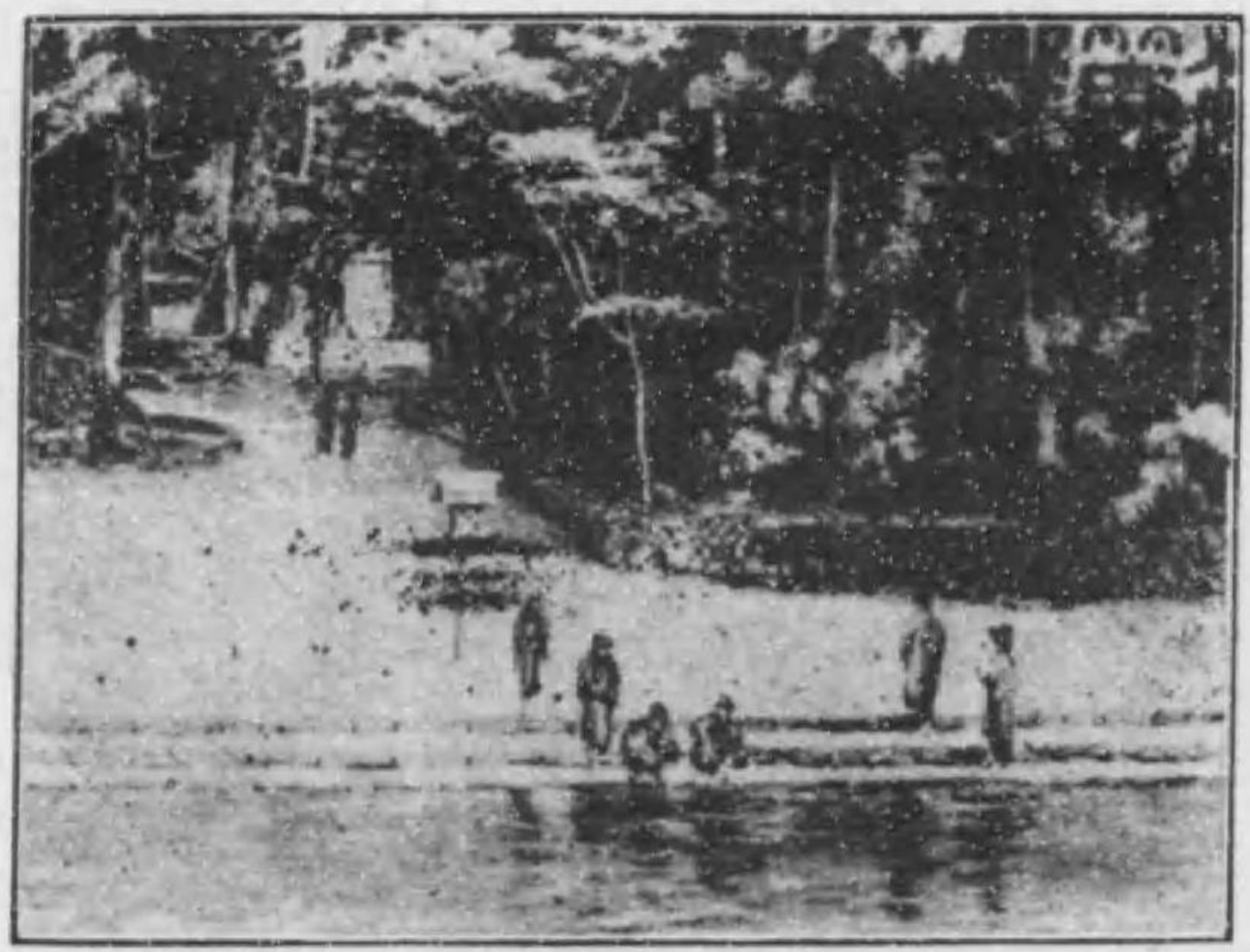
宇治大橋

新橋身總槍造三尺百二寸幅六十尺六寸袖八十尺六寸反六尺六寸附珠載る光和



十五鈴川洗手場

靜かなる世に波は神の十五鈴川より立へるむら



參籠所
とが
ある
其
の右
方に
五十
鈴川
洗手
場が
あつ
て
清浄
な
神氣
が漲
つ

手洗場から凡一町程參道を進むと二鳥居がある。其左側に御廩があつて神馬二頭を飼養してある。

御廐の東に裏參道があり其出口に御池と御橋と御廐がある。

與所の

前方に

風日祈

宮橋が

あつて

其奥に

別宮風

日祈宮

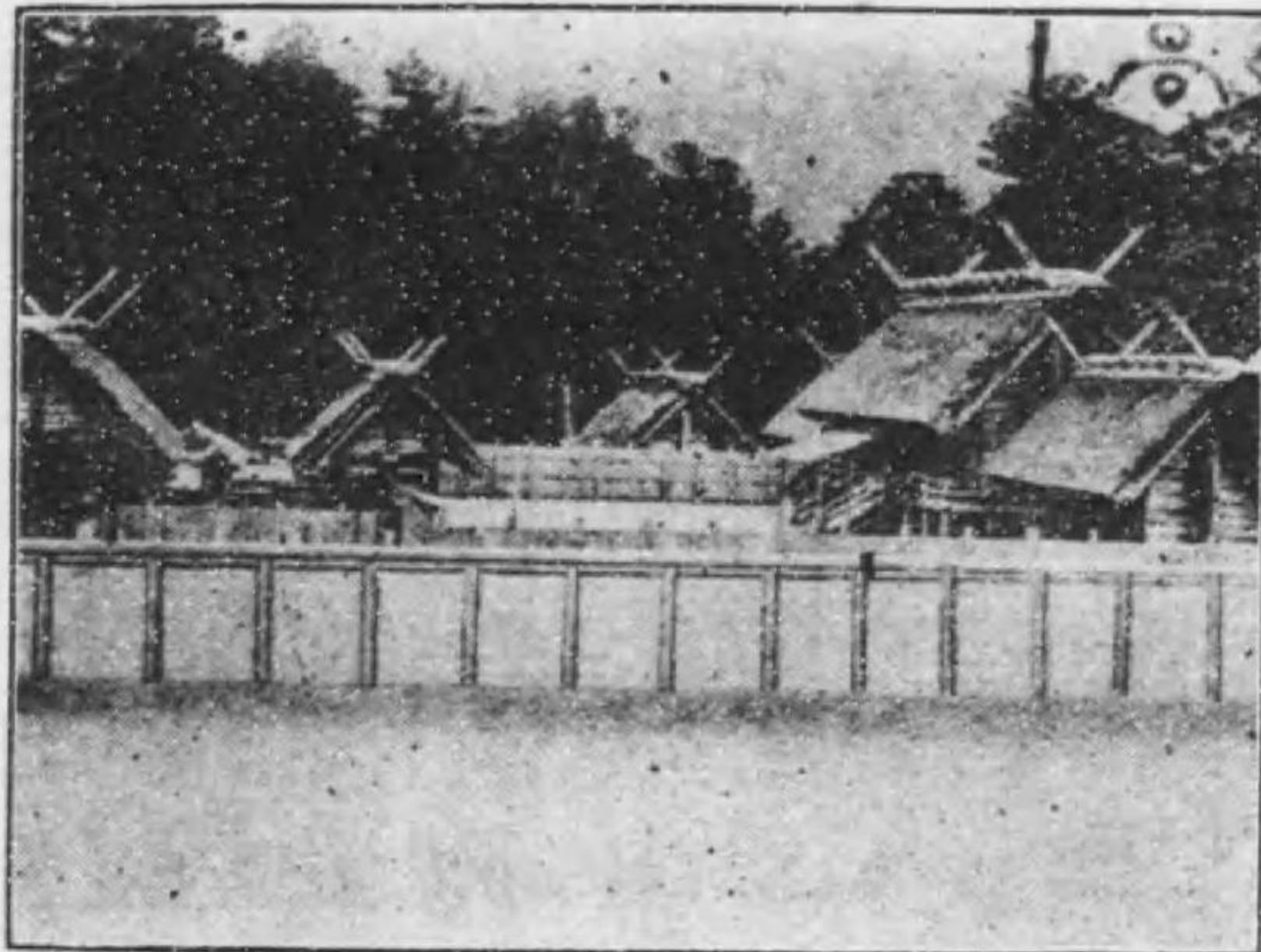
がある

五丈殿

の東方

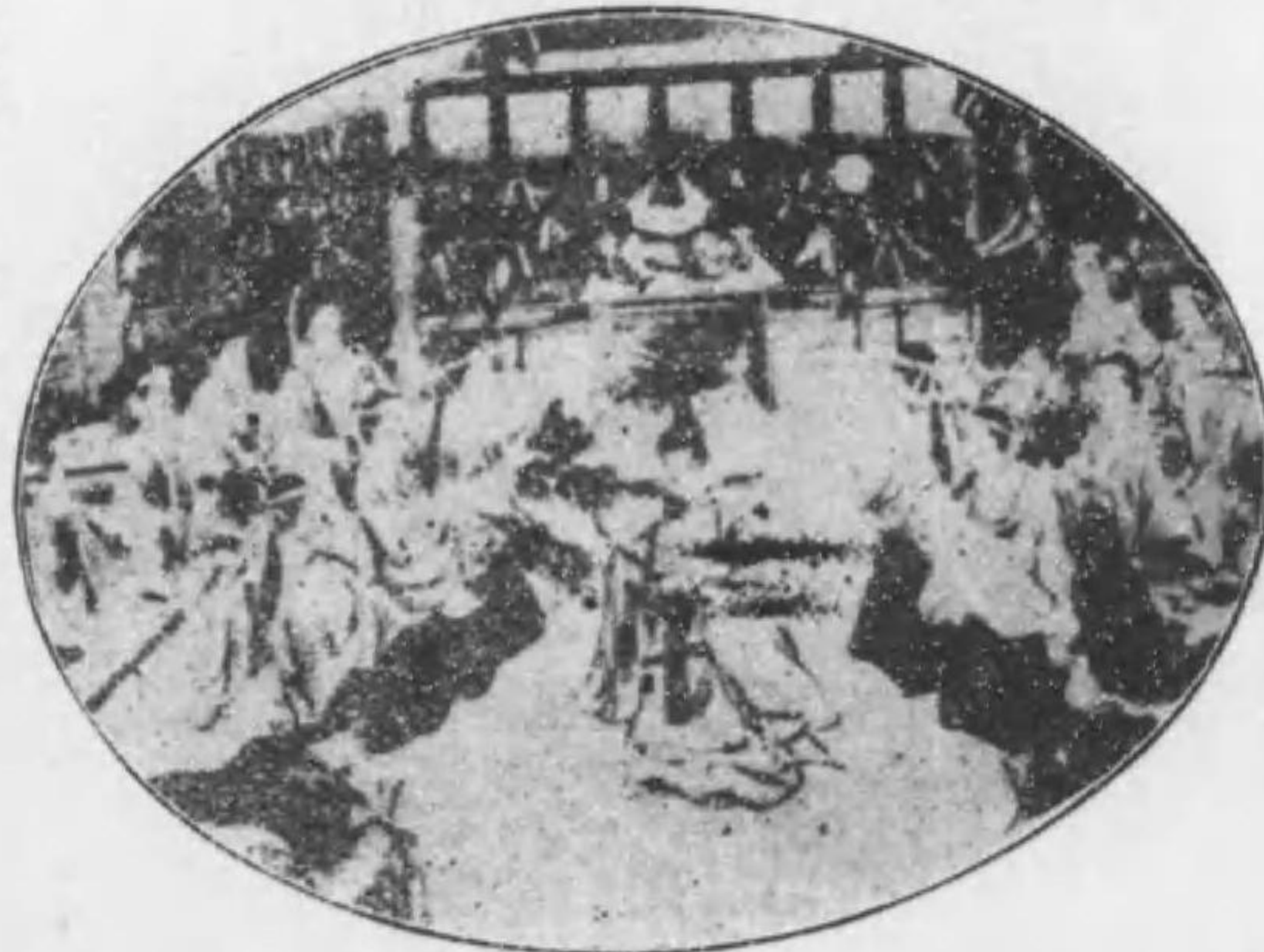
殿正宮内

神大の勢尹れ守を代我るなる祈されの安民にへしこと
皇天治明



樂神御々大

神々大別樂神々大樂神大樂神小てに上に以五種五の樂神々大別特樂
に上に以錢拾五金は領御禮祈りあり等三二一て



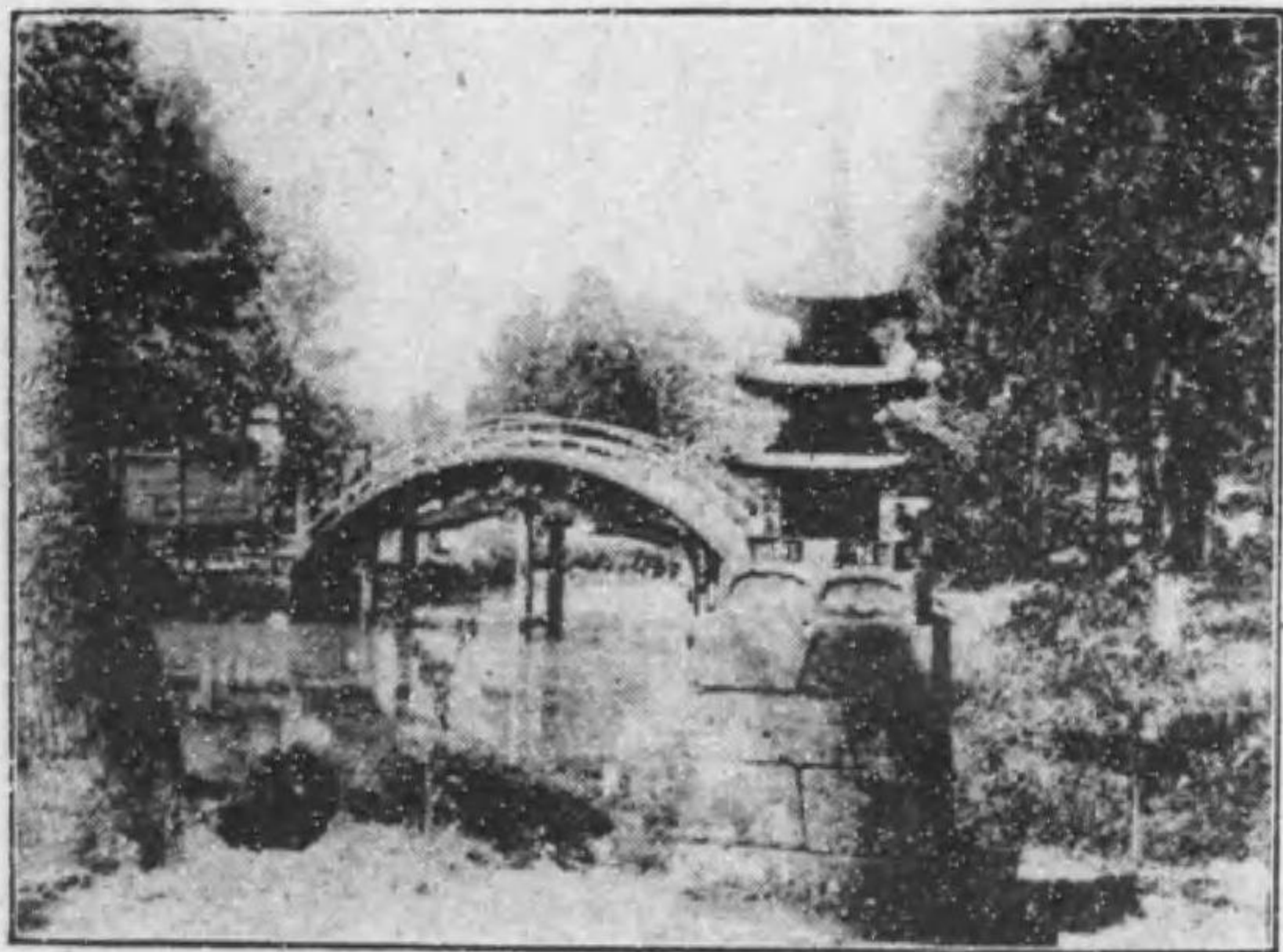
大御授
にある
建物は大御儀を調理する忌火屋殿、其東方にある、御倉、外幣殿

である。神樂殿から三町程進むと左に十數階の石段があつて其高地に皇大神宮正殿がある。神樂殿の構造は外宮と同じく神明造葺で御屋根に十本の鯉木を置き内切の千木を組立て金光燦たる金物の東方

を粧飾して高天原に照り輝いて居る。東西寶殿は正殿の後方に在つて瑞垣、番垣、内玉垣、外玉垣、板垣の重々御門と南北宿衛屋と中重鳥居と四丈殿とが御垣内にある。正式參拜取扱は外宮同様で、兩宮參拜の順序は古來外宮を先にし内宮を後にするを例として居る。

寺證剛金岳熊朝

すも尊本を薩菩大藏空虛てしに利古の興中海空
蕉芭像榮湿すげかもひ思や垣神



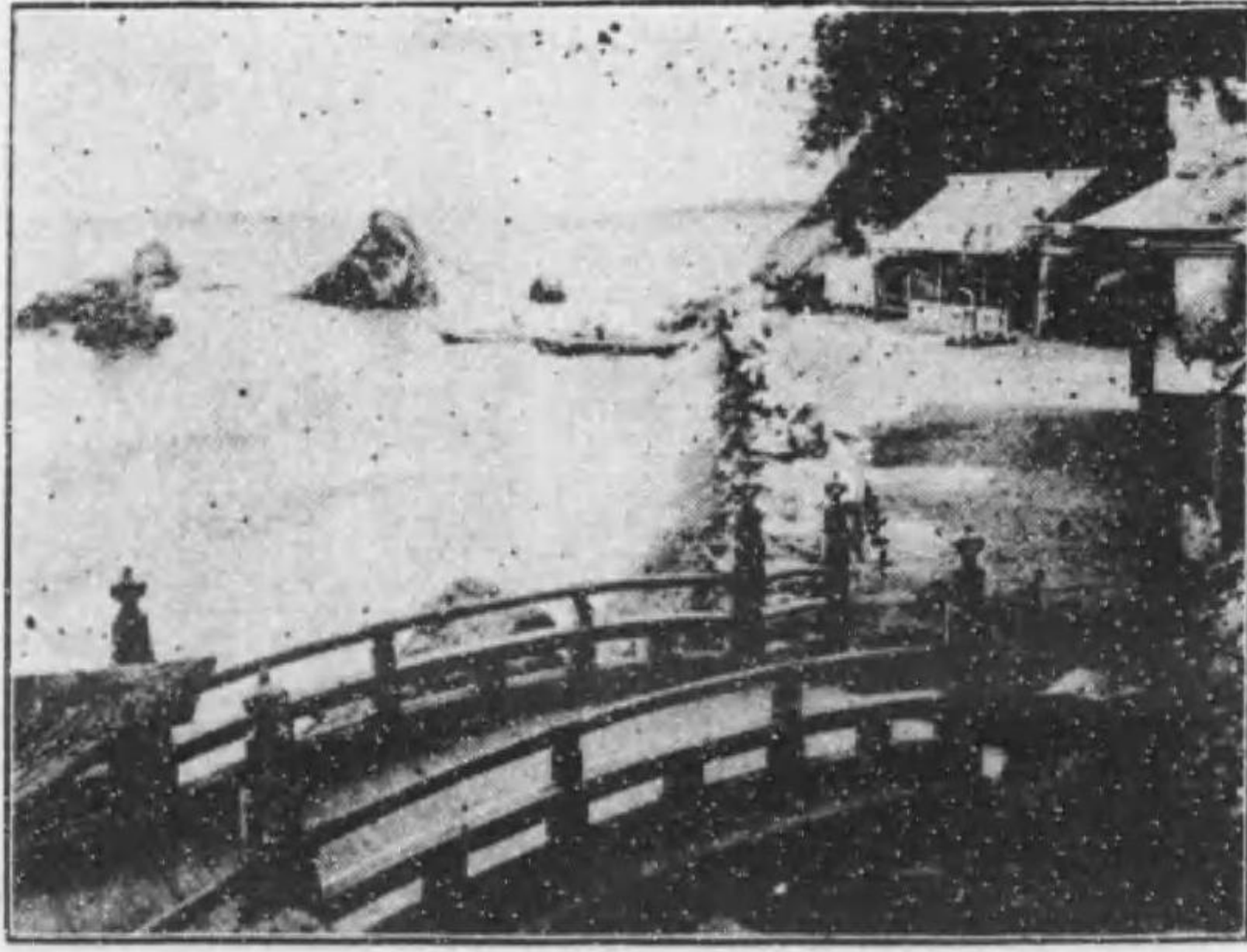
●名所巡遊
兩宮參拜の順序及び宮域内に於ける大體の案内をすましたから神都名所巡遊の梗概を述べよう。

が順序である。もし順路不案
受して裏參道から退下するの
として、外宮參拜後外宮前から内宮行の電車自動車に乗り、都合によつては途中倉田山下下車して徵古館農業館を観覽し、再び電車自動車に乗つて内宮に向ひ内宮參拜後宇治橋前から電車に乗つて二見に

行き、二見浦に遊んでから今度は汽車に乗って鳥羽に行き、鳥羽驛から直ぐ汽車で何れの方面へでも歸ることにする。朝熊山に參詣する方は、内宮神苑地内から直ぐ表坂を登つて金剛證寺に至り千八百尺の高空に立つて佛陀の雪光を拜した上、裏坂を下つて二見浦に出るもよい、又、楠部、朝熊から裏坂を登つてもよい。山上に野間萬金丹本舗、さうふ屋旅館があつて遠望の壯觀に富んで居る。

二見浦風景

新嘉坡心も清玉き二見浦のひそあへるき



て、神都第一の淨地たることを尊重されて居る。此の浦の天下に知られたのは唯風景がよいばかりでなく、清淨なる潮水に心身を潔くする禊齋場として世に聞え、神蹤靈跡の尊嚴を尊ぶ美俗を成すに至つた

●二見浦

二見浦は伊勢灣内の一景勝で皇大神御遷幸の御時此地を御經歷あらせられ、大御饌御料の御鹽調進所と定められて以來今に渝らす御盛を供進して居る上、大御饌御料の野菜果實をも栽培し奉ることとなつ

からである。

二見浦に名所は多いが著名な所は立石崎、夫婦岩、音無山、千導海、伊氣浦、濱萩、打越濱、御鹽殿等である。二見海水浴の世に知られたのは明治十五六年頃で今の茶屋町の發展したのに、二十年頃から急速な繁榮を促された結果なのである。二見浦は絶好の慰安地として年々遊覽者の數を増し遂に大神都經營の要部を占むるに至つたのは當地の歴史が神宮鎮座と密接の關係を有するからである。

鳥羽港日和田

營英皇照太皇太后御駐紮の地氏に創る明り天治



汽車電車を下りて一二町行けば大旅館土産物商店等が軒を並べ、自動車の設備もあつて旅情を慰めるには相當の施設も整つて居る。伊勢土産としての名物は貝細工、二見館、朝日海苔、伊勢ふのり、二見焼陶器等あつて濱の松風に其名を鳴らして、全国的に評判を求めて居る。

●鳥羽港

鳥羽は舊伊勢内宮の神領地であつたが、保元、平治の頃橘氏の押領する處となり次で九鬼嘉隆の治する處となり、内藤、土井、松平、板倉諸氏を経て稻垣氏の居城地として志摩國の首腦を占め東海の要津

として盛名を謳はれた。

此港灣は北方に山を繞らし東に坂手、菅島、答志、桃取の諸島羅列して大洋の風波を防護して居る爲灣内常に波静かに暖潮深く湛へて船舶の碇泊出入に便利である。灣内の廣茅東西四十間南北六町四十間水深約五丈を有し、優に三四千噸、船を容るゝに十分である。灣外に國崎、石鏡、安樂島、神島あつて島巡りの清遊をなすべく

りどびわあ的女摩志



今朝なきてかもめたちたつ鳥羽の海面」と御製あらせられ、同二十年英照皇太后亦此地に御駐輿あらせられて風光を御感賞あそばされた。

展望台がある。明治十年一月明治天皇御巡幸の砌、浦風も荒磯波も趾、常安寺、蓬萊島、錦の浦、縁期松等あり。廣樂園は廣野氏の經營して一般遊覽者に開放せし處、日和山は本港第一の好展望台で明治二十四年東宮に坐した今上陛下の御登臨あり。同三十七八年日露戰役中は伊勢神宮御守衛の爲警護兵を置かれ其後貴顯船神の登遊頻繁となつて益々其名を喧傳せられた。樋

の山は大正六年東洋遊園地株式會社の經營に移つて規模雄大囑望の壯觀を以て盛贊されて居る。又、常安寺は慶長十二年九鬼守隆の創立した處で九鬼氏及稻垣氏の菩提寺であるが、明治天皇御駐輿英照皇太后御駐輿の御遺蹟を留めて名高い古刹となつて居る。

當港附近の名勝地には桃取辨天島、神島燈臺、菅島燈臺、青峰山正福寺、菅生浦辨天、國崎鐘崎、安樂燈臺等あり。

名物には布海苔、鰹粕漬、磯の花(味附若苔布)黒鯛子溜り漬、糸若海布、伊勢海老等あつて何れも盛名を馳せ、眞珠貝の源産地として貝類の加工品優稱され、海産物の加工品亦頗る發達好評を博して居る。尙、本港より遊覽船を出して港口港外の諸島を巡覽し、海女の鮑取を觀るのは趣味の深い語り草となつて居る。

神宮參拜のしをり終

最後に伊勢參宮についての重なる旅館や土産物店を左に御案内しませう

山田驛前通りから古市を経て宇治町に至る

| | | | | | |
|-------|--------|-------|--------|-----|--------|
| 驛前旅館 | 宇仁館 | 驛前 | 油屋支店 | 驛前 | 高千穂 |
| 驛前 | 松島館 | 同 | 佐伯旅館 | 大和 | 旅館本店 |
| 同 | 朝日館 | 同 | 宮崎館 | 岡本町 | 神風館 |
| 八日市場町 | 千秋樓 | 八日市場町 | 福みさき大夫 | 北町 | 料理兼戸田屋 |
| 岩淵町 | 三日市大夫 | 驛前 | 竹屋六兵衛 | 倭町 | 十五樓 |
| 倭町 | 五二會ホテル | 外宮前 | 高千穂本店 | 古市町 | 油屋本店 |
| 古市町 | 大安 | 中ノ町 | 麻吉 | 宇治町 | 大橋館 |
| 宇治町 | 五鈴館 | 宇治町 | すし久 | 宇治町 | 鈴七 |
| 宇治町 | 風の宮 | 同 | 越中 | 同 | つぼや |
| 同 | 榊原 | 同 | 二光堂 | 同 | |

同土産店

| | | | | | |
|-------|------|-------|------|------|------|
| 驛前 | 稻葉屋 | 同 | 松野屋 | 同 | 林商店 |
| 同 | 中津商店 | 同 | 野島屋 | 同 | 及物店 |
| 同 | 川岸 | 同 | 高木商店 | | 菊一文字 |
| 二見の浦 | | | | | |
| 旅館 | 朝日館 | 同 | 松島館 | 同 | 二見館 |
| 同 | 濱千代館 | 同 | 吸霞園 | 同 | 大勢館 |
| 土産物店 | 中尾商店 | 同 | 若松屋 | 土産物店 | 角屋 |
| 土産物店 | 中林商店 | 同 | 石僊本舗 | 同 | 植松商店 |
| 錦浦館 | 長門館 | 大和館支店 | 海月 | 赤崎 | 對月樓 |
| 角卯館 | 對神館 | 柳屋 | 樋の山 | 皆春樓 | |
| 驛前休憩所 | 森井商店 | 中尾支店 | 海産物 | 石井商店 | 海産物 |
| | | | | | 山村商店 |

鳥羽港驛前通りから錦町通りに至る

287
524

大正十二年四月二十日印刷納本
大正十二年四月廿五日發行

不許
複製

著者 清水藏造

發行人 三重縣志摩郡烏羽町錦町
山村萬次郎

印刷人 京都市木津屋橋堀川東入
早崎鶴之助

發行所 三重縣志摩郡烏羽町錦町
伊勢參宮葉刊行會
〔振替東京二六五七〇番
電話一三三番〕

終

